

## 消費者ニーズを考慮した牛肉の効率的生産に関する調査・研究

木下 強、斎藤憲夫<sup>1</sup>、田村孝二、島田 研<sup>2</sup><sup>1</sup>栃木県北家畜保健衛生所、<sup>2</sup>栃木県農業大学校

**要約** 消費者及び生産者双方の求めている牛肉の生産方式を明確にするための一環として、統計資料や市場の動向について検討を行った。

(1)国内の牛肉の販売動向は、平成13年のBSE発生までは牛肉の輸入増加にもかかわらず、競合する中低価格帯の国産牛肉の販売単価が上昇傾向にあったが、BSE発生以降は価格が急落した。平成14年度には全体的に単価の水準を戻したが、和牛のA3,A4以外はBSE患者発生前の水準まで回復するまでには至らなかった。また、日本国内におけるBSE発生に伴い海外からの輸入量も大幅に減少した。これらのことから安全安心の確保が消費者のもともめる牛肉生産のための最も重要な条件であると考えられた。

(2)全国の牛肉消費の構成割合をみると家計消費が減少傾向にあるのに対し、業務用や外食産業向けの消費が増加してきており、外食や中食仕向の割合が高まってきていることから、需要動向の変化に合った値ごろ感のある牛肉の安定供給が必要になってくると考えられた。

(3)和牛子牛の主要市場における販売価格の推移をみると去勢牛、雌牛とも平成6年から価格が上昇傾向にある。平成13年度はBSEの影響により販売価格が下落しているものの、平成14年度時点で市場平均で全国平均を5万円程上回る高値市場となっており、素牛の安定供給を図るためには一貫経営方式導入の可能性についても検討する必要があると考えられた。

## 緒言

安全で美味しいものを安くという消費者ニーズの変化にともない、国産牛肉が注目される中、肉用牛生産現場においては肉質に偏重した生産方式（素牛の選定、飼養管理等）が主流となっているために、肉量不足や素牛への過剰投資傾向など、かならずしも消費者、生産者双方の求めている牛肉の生産供給状況にあるとはいえない。

そこで、消費者のニーズすなわち市場の動向を的確に把握するとともに、生産現場の実状にあった生産方式（目標とする枝肉規格等）を明確にすることにより、肉用牛肥育経営における効率的肉用牛生産及び経営の安定を図る。

## 材料及び方法

消費者及び市場ニーズについて把握するため、既存の統計資料や枝肉の格付け状況について検討した。

また、生産を取り巻く状況の一つとして、生産費の大部分を占める素畜費の動向を把握するため県内肥育農家の主な素畜導入先である栃木県矢板家畜市場の市場動向について検討した。

## 結果及び考察

## 1. 枝肉の取引及び消費仕向の状況

東京市場における牛枝肉平均販売単価の年次別推

移を図1に示した。

平成8年度から平成12年度にかけて、去勢和牛A5～A3規格の枝肉、特にA3,4の単価が漸減し、逆に単価が1,500円以下の価格帯に位置する枝肉規格については、単価が上昇する傾向が見られたが、国内初のBSE患者発生により単価は軒並み下落した。

平成14年度には全体的に単価の水準を戻したが、和牛のA3,A4以外はBSE患者発生前の水準まで回復するまでには至らなかった。

特にBSE発生前まで上昇幅が大きかった低価格帯の枝肉ほどBSE患者発生後の下げ幅が大きく、単価水準の回復幅も小さかった。

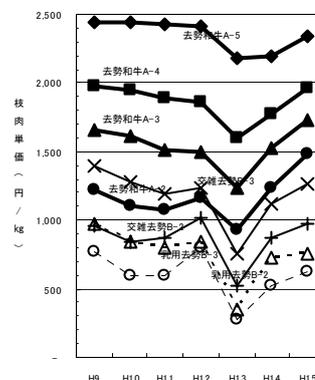


図1 牛枝肉平均単価の推移 (東京食肉市場)

図2には牛肉の国内生産量と輸入量の推移について示してあるが、国内におけるBSE発生に伴い海外からの輸入量も大幅に減少した。

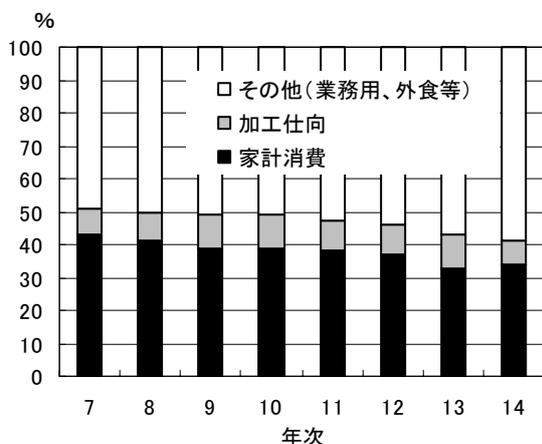


図2 牛肉消費の構成割合(全国)

国産牛肉の安全性が揺らいだことにより、牛肉全体の消費が減少してしまったことは、国産牛肉に対する信頼度がいかに高いものであったかを示しているものと考えられる。

これらのことから、国産牛肉はもとより、県内産牛肉の消費拡大を図っていくためには、今まで以上に安全安心に配慮し、消費者にアピールできる高品質牛肉生産体制の確立が必要であると考えられた。

## 2. 子牛市場の取引状況

図4に県内の和牛子牛の主要市場における販売価格の推移を示した。平成5年から横ばい若しくは微減傾向にあるが、平成12年から微増傾向にある。

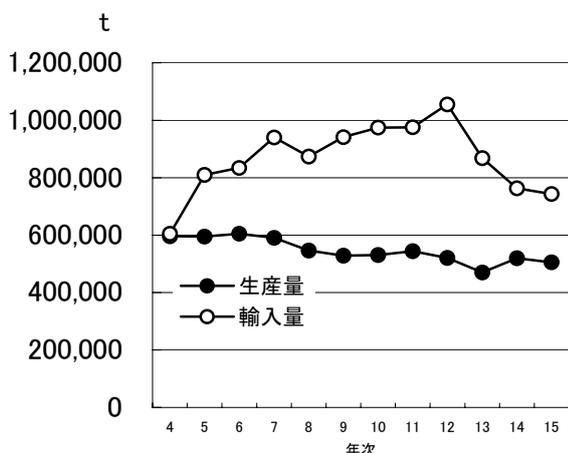


図3 牛肉需給の推移

また、子牛の販売価格については去勢牛、雌牛とも平成6年から価格が上昇傾向であったが、平成13年度はBSEの影響により販売価格が下落している。肥育農家にとっては、以前より若干素畜購入費の節減になると思われるが、平成14年度時点では依然として市場平均で全国平均を5万円程上回る高値市場となっている(図4)。

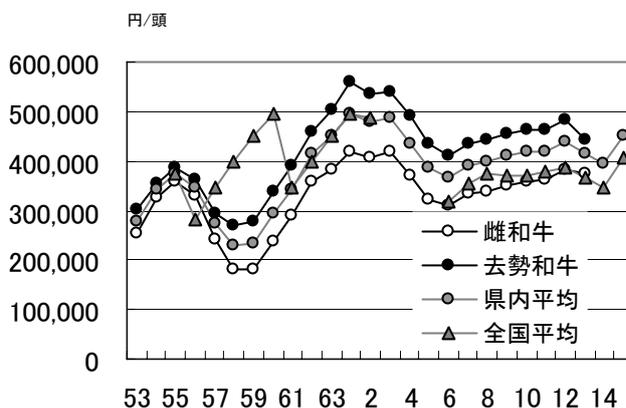


図4 子牛価格の推移(矢板市場)

肥育経営において素畜費は、生産費の6割以上を占める重要な経費であり、素畜を全て県内から調達した場合は、肥育牛の販売価格を全国平均よりも高く販売しなければならないことから、引き続きA5若しくはそれに準ずる高品質の牛肉を確実に肥育できる技術の確立が必要であると思われる。一方では、図1にあるようにA4~3の価格帯が近接してきていることから、枝肉重量に主眼をおいた値ごろ感のある牛肉の安定生産技術を確立し、高品質牛肉生産技術と併せて使い分けていくのも一つの方策であると考えられた。

## 文献

- 1) 農林水産省生産振興局畜産部食肉鶏卵課.食肉便覧.(2000)